

ノロウイルスの感染について

【ノロウイルスとは】

胃腸炎をおこす代表的なウイルスで、1968年に米国で見つかり、2002年に正式にこの名前がつきました。乾燥や熱に強く、感染力も非常に強いため少量のウイルス（10～100個）が体内に入っただけで感染するといわれています。

貝類のほか、感染者の便や嘔吐物からも感染し（二次感染）、通常は発症から1～2日で回復しますが、乳幼児や高齢者など抵抗力の弱い人は重症化したり、吐いた物を誤って詰まらせ亡くなる場合もあります。

【今シーズンにおけるノロウイルスの変異と流行について】

ノロウイルスはウイルスの設計図にあたる遺伝子の違いによってGからGの5つの群に分けられています。ヒトの感染症や食中毒から検出されるノロウイルスの大半はGとGに属していますが、これらはさらに30種類以上の型に分類されており、2006年に大流行した「G.4」と呼ばれるタイプの遺伝子の一部が変異したものが昨シーズンまでの主流でした。2015年には「G.17」と呼ばれるタイプの遺伝子の一部が変異した「G.17Kawasaki2014」が主流となっています。

ヒトには一度感染したウイルスや細菌を記憶し、効果的に撃退する「免疫」と呼ばれる機能があります。しかし、ウイルスは変異によって形を変え「免疫」から逃れることでヒトへ感染しやすくなります。

【検査について】

ノロウイルスは人間の小腸でのみ増殖し、培養（人工的にウイルスを増やすこと）することが難しいため、従来は電子顕微鏡でウイルス粒子を確認していましたが、現在ではRT-PCR法、リアルタイムPCR法などのウイルス遺伝子検査やEIA法やイムノクロマト法のウイルス抗原検査が用いられています。

環境総合センターでは、ノロウイルスを疑う食中毒や感染症が起きた場合、高感度で特異性が高く、短時間（5～6時間）でウイルス遺伝子を検出することができるリアルタイムPCR法を用いて検査を行っています。

一方、抗原検査は遺伝子検査に比べて感度は低いですが、検査結果が30分以内に判るため、主に医療機関などでノロウイルスによる感染性胃腸炎の診断に補助的に用いられています。

【検出状況について】

環境総合センターでは、感染症発生動向調査事業に基づく病原体定点（医療機関）のご協力のもとウイルス検査を実施しています。

そのうち、平成27年1月から12月までに感染性胃腸炎と診断され、当センター

で検査を行った 131 検体のうち、29 検体からノロウイルスが検出されました。

《参考》

国立感染症情報センターのホームページ「ノロウイルス検出状況」

<http://www.nih.go.jp/niid/ja/iasr-noro.html>

【予防法について】

ワクチンや特効薬はなく、予防には手洗いの徹底が必要です。指の間や親指、手首までせっけんで洗いましょう。また、加熱食品は十分に加熱することが大切です。

正しい手洗いの方法は、別記事『食中毒・感染症の予防には正しい手洗いが大事です』を参考にしてください。

【消毒法について】

85℃以上で1分間以上の加熱を行うか、「次亜塩素酸ナトリウム」を成分に含む塩素系漂白剤や殺菌剤で消毒することでウイルスを失活化できます。

ノロウイルスに感染し胃腸炎症状がある方の便や嘔吐物には大量のウイルスが含まれていますので、適切に処理しないと様々な場所で感染が拡大します。中には嘔吐物が付着して10日間以上過ぎたカーペットから感染したケースもあるので、十分な消毒が必要です。なお、消毒する際には、アルコールを主成分とした消毒薬はノロウイルスには無効ですので注意してください。

消毒の方法は、以下を参考にしてください。

《参考》

厚生労働省のホームページ「ノロウイルスに関するQ&A」

<http://www.mhlw.go.jp/topics/syokuchu/kanren/yobou/040204-1.html>